

生業経済からみるマレーシアの 辺境

—JAMS 関西例会報告—

信田敏宏

2005年3月25日、京都大学教育学部320号室にて、JAMS関西例会を開催いたしました。出席者は14名でしたが(なかには東京から出席された方もおられました)、活発な議論が展開され、盛況な会となりました。例会会場を提供して下さった杉本均先生に改めて深謝いたします。

今回は共通論題として「生業経済からみるマレーシアの 辺境」をかかげました。奇しくも、生態学的なアプローチで、マレーシアの辺境世界を調査研究している若手研究者の方々に発表を依頼したからです。

以下、発表者による要旨と杉本均先生による質疑応答メモを掲載いたします。

第1セッション

内藤大輔氏(京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科院生)

「マレーシア半島部ヌグリ・スンピラン州における先住少数民族トゥムアンの生業変容」

[発表要旨]

マレーシア半島部南部の先住少数民族トゥムアンは森林地域の周縁部に居住し、多様な農作物の栽培に加えて、狩猟採集に従事し、森林産物交易にも携わってきた人々である。

ゴム、アブラヤシ園などの開発により森林が減少してきているなか、これまでの歴史的変遷、生

業変容を把握し、狩猟採集の現状をみていくことで、トゥムアンの人々の森林との関係について考察する。

マレーシア半島部ヌグリ・スンピラン州ジェルブ県アイル・バニン村において、2004年6月から11月まで、世帯調査、聞き取り調査を行なった。狩猟や採集に同行し、観察、記録を行った。また関係政府機関での聞き取り、資料収集も行なった。

アイル・バニン村では1970年代よりゴムが植えられ、1980年代に水田がアブラヤシ園に転換された。村の人々の収入の中心となる生業は、ダマール、ロタンなどの換金森林産物採集からゴム採液、アブラヤシ収穫、道路清掃業などの農外就業へと変わってきている。

一方で、狩猟採集は、平日の午後や休日などに頻繁に行なわれており、追い込み猟など大勢で狩猟を楽しむ機会にもなっていた。狩猟場所には、ゴム園やアブラヤシ園の間に残る孤立林を頻繁に利用し、獲物を追やすいという孤立林の利点を生かした猟法も行なわれていた。

森林は、多様な動物が捕れる狩猟の場として、また吹き矢の矢毒、食用森林産物の採集、儀礼用の樹脂など孤立林にはない森林産物の採集の場として、依然として他に代替できない存在でありつづけていることも明らかになった。

[質疑応答]

質問: トムアンの主食と副食肉類について、また狩猟による肉類に由来する蛋白源の比重について。(小野林太郎氏)→回答: 主食穀類は米とキャッサバ類などで、穀物は常に食事 で用意される。副食肉については漁労もさか んでほぼ毎日確実に魚類は捕れる。鶏、豚な どは、近くにマーケットがあり、引き売りも毎日 のように来るので、そこから買っている。狩猟に よりサルの肉が手に入ったときは、他の肉類と まぜずに食べている。しかし実際にはマーケッ トからの蛋白源にかなり依存している。

質問: アイル・バニン村の人びとの生業分類に ついて、就業比率に無職者は含まれるか。「研 究職」とは何か。(山本博之氏)→回答: 無職 者は含まれていない。研究職とは、地域の研 究所が森林調査をするときに雇用される補助 員。

質問: 子どもの就学率と狩猟技術の伝承形態 について。(杉本均氏)→回答: 就学率は低い。 中学にもなかなかいけない。狩猟技術につい ては村内にゆるい血縁関係のあるいくつかの グループがあり、そのなかで技術が伝えられて いる。

質問: 「オラン・アスリは森に依存している」とい うときの依存度とはどう定義するのか。近代化、 都市化の影響は。(阿部健一氏)→回答: 生業 の稼ぎ頭はゴムやアブラヤシであるが、オラ ン・アスリには「おれは森に入る」「マレー人は 森が怖い、自分は怖くない」という誇りがある。

都市化の様々な誘惑に従わないという誇りが ある。村では全員が吹き矢の技術を持っている。近代化、都市化の方向性としては(1)イスラ ームに改宗してマレー化する、(2)経済的に華 人と協力を強化する、(3)伝統回帰としてアイ デンティティを誇示する傾向、に分かれる。

質問: 狩猟採集が死活問題であった時代はあ ったのか。世代間で継承しようという意識はあ るか。階層間の格差と狩猟活動参加の関係 は?(左右田直規氏)→回答: 技術の継承は、 森自体の消滅と平均寿命が短いこともあって 難しくなってきた。「狩猟の話はできても実 際の対象や場がなければウソになる」という意 識。貧しさと狩猟参加の関係は調査していな いが、お金だけの理由ではない。むしろ本当 に貧しい世帯ではゴムやアブラヤシだけで手 一杯で狩猟にはいけないということもある。

質問: 儀礼や技術を守りたいというのはアイデ ンティティの危機があるからとしていいのか。そ うだとすると、それは外来の危機か。また、宗教 や民族性というストーリーではなく、生業の変 容でアイデンティティを語れるのか。(山本博 之氏)→回答: 自然破壊による森の消滅は深 刻である。対処的に森の植物の苗をゴム園の なかに植えたりしているのは危機意識から。外 来要素としては村人の中にムスリムの人々が 増えてきて食生活が変化してきている。ロタン やダマールの採取はゴム、アブラヤシに変化 していったが、漁労や狩猟は依然として残っ ている。どちらも重労働であるのに、開発されて

豊かになっても残るものは残っているといえる。

(杉本均)

第2セッション

小野林太郎氏(日本学術振興会特別研究員)

「ボルネオ島サマ・バジャウ集団の生計・経済活動と食生活の現状」

〔発表要旨〕

(1)はじめに

ボルネオ島東岸域からスルー諸島へと続く多島海域にはサマ或いはバジャウと呼ばれる人々が居住している。本報告では彼らを総称してサマ・バジャウ集団と呼ぶことにする。20世紀以前の時代、サマ・バジャウ集団の多くは土地を持たず、家舟居住を基本としてこの地域の浅いサンゴ礁域を主な生活圏とし漁撈・漁業活動に特化する生計活動を営んできた。こうしたサマ・バジャウ集団の独自の海洋適応から文献史上では「漂海民」や「海のノマド」としてのイメージが強い。

しかしボルネオ島東岸のセンポルナ海域を主な居住圏としてきたサマ・バジャウ集団の中には20世紀以降、海域内の離島群沿岸域に定住化する傾向が見られ、1950年代以降はその傾向に拍車がかかり現在に至っている。こうした定住化の動きと共に、センポルナ海域のサマ・バジャウ集団における生計活動や居住地も急速に変容した。特にマレーシア国家の成立と熱帯雨林の伐採等に代表される1960年代以降の急速な

開発以来、政府主導の下に離島に住むサマ・バジャウ集団の内陸・半島部への移住が促進され、漁撈・漁業活動以外の様々な生計経済活動に従事する人々が増加する傾向が強い。

その一方でこの海域には定住化を拒み、伝統的と呼ばれる家舟居住を基本として漂海生活を続けてきた人々も存在する。一般的にこの人々は「海サマ・海バジャウ人」として認識される。彼らの中にも1960年代以降、定住する人々が増加する傾向にあるが、現在でも半定住化生活を保ち、マレーシア領域となるセンポルナ海域とフィリピン領域となるスルー海域を生活圏として漁撈・漁業活動に従事する人々が存在する。

(2)研究の目的

本研究はこうした定住化したサマ・バジャウ集団と半定住化している海サマ・海バジャウと呼ばれる人々がモザイク状に居住するボルネオ島東岸のセンポルナ海域における離島部を主な対象として行われてきた。その目的の一つは両集団に属する村落において世帯レベルの視点で実践される生計経済活動の内容や相違を確認・観察する点にあった。更に村落レベルでの視点から、村落内の各世帯群における主要な生業活動が、世帯経済のレベルや食生活レベルとどのような相関性にあるのかを検討することが第二の目的として挙げられる。

(3)結果と課題

これまでの調査では5村の定住化集落と1村

の半定住化集落における約 250 世帯を対象としてデータを収集した。これらの村落はいずれも離島域に立地しているが、海域の中心部であるセンポルナまでの距離やアクセス度、また村落周囲の陸上・海底環境には多様性が認められる。その結果、定住化集落においては村落の立地環境によって世帯単位で実践される生計経済活動にかなりの偏差がみられた。また全体として漁撈・漁業活動に従事する世帯の比率が離島域でもそれ程高くないことも確認された。これに対し、海バジャウ人を主体とする半定住化集落では調査を行った全ての世帯が漁撈・漁業活動に従事することが確認された。また同じ漁撈・漁業活動でもそこで実践される漁法や平均漁労時間に関しては、定住化集団と半定住化集団の間に大きな差異が認められた。

一方、世帯経済学的な視点においては何らかの給与所得労働に従事している世帯の経済指数が高く、漁撈・漁業活動に従事する世帯の経済指数が村落内における世帯群の中でも最も低くなる傾向が確認された。これに対し、より専門的に漁業活動に従事する半定住集落における経済指数は定住集落における漁業従事世帯よりも高くなる。また各世帯にける経済指数と食生活の間には大きな差異は認められなかった。

その要因として摂取エネルギーの大半を安価なベトナム産米や砂糖、小麦粉に依存し、蛋白質としての魚介類への強い依存が指摘できる。ただし唯一の例外として、長時間の漁労活動に従事する世帯数の多い定住化村落の M 村と海

バジャウ人によって構成される判定住化村落では、主食の内訳としてコメよりもキャッサバの利用頻度が高くなる傾向が認められた。現在のセンポルナ海域での 1kg 単位あたりの価格はコメもキャッサバも 2~3RM と等しく、両者の 100g あたりのエネルギー量 (kcal) もほぼ一致している。従って、M 村および海バジャウ村落における主食の消費においてキャッサバへの依存度が高くなった要因を、その経済価値や栄養学的価値に求めることはできないことになる。

これに対し、M 村や海バジャウ村落を含む調査を実施した全ての村落では「長時間を海上で過ごさねばならない漁労活動や海上生活においては腹持ちの良いキャッサバが何よりも重要だ」という言説や「サマ・バジャウ集団における伝統的な主食はキャッサバである」との言説が多く得られた。これらの言説と先述した食料調査の結果からは、サマ・バジャウ人のキャッサバに対する認識や嗜好性が見え隠れしているように思われる。同時に彼らの嗜好性は副食における魚介類への高い依存度にも見て取れる。このうち副食における魚介類への依存度の高さは、彼らの多くが専業ではないにせよ現在でも漁撈を嗜み、また沿岸域に居住している点等からもより容易に理解できる。しかし主食としてキャッサバを好む背景には言説に表れる「腹持ちが良い」という理由以外の要因もあるように感じられた。

例えば、その一つの可能性はキャッサバの料理法である。既に概観したようにサマ・バジャウ集団はかつて家舟生活を営んでいた。海の上ある

いは現在の様な離島域での生活において最も重要となるのは水の確保であり、基本的に飲み水は貴重な存在となる。ところが、調理の際に水を必要とするコメに対し、サマ・バジャウ集団におけるキャッサバの調理法は一般的に粉末状に加工されたキャッサバ澱粉をフライパンで炒めるだけであり、水も必要としない。即ち、こうした調理における容易さも海洋適応してきたサマ・バジャウ集団にキャッサバが好まれた要因の一つではなかったか。同じように土壌が貧困である隆起サンゴ礁島での栽培にキャッサバが適していたという生態学的な要因も指摘できる。しかし、これらの議論は現時点では発表者の推論の枠を超えていない。今後の調査・研究における課題としては、これらの点を含めたより詳細なデータの収集を行う必要が指摘される。

[質疑応答]

質問: 魚をセンポルナとフィリピンで売り分けているというが、価格などの情報はどこで入手するのか? (山本博之氏) 陸バジャウと海バジャウの人々の人間関係は? (信田敏宏氏) → 回答: 基本的には個人的に情報を集めているが、陸バジャウと海バジャウの人々は遠い親戚に当たるような関係やつきあいがあり、魚を売るときも、漂海民が定住化しているバジャウの人々を仲買人のようにして売っている。

質問: 5 村を調査地に選んだ理由は? (内藤大輔氏) 海バジャウの調査が 20 世帯と少ない理由は? (河野元子氏) → 回答: 離島地域で

少しでも漁労が行われている領域から特徴ある 5 村を選んだ。海バジャウの人々はマレーシア国籍を持っておらず、インフォーマントの確保が難しかった。

質問: 子どもの就学率と海バジャウと陸バジャウでの教育の違いは? (杉本均氏) 都市に行き高学歴で戻ってくるケースは? (柳沼宣裕氏) → 回答: 陸バジャウの場合の就学率は 80 ~ 90% 程度はあり、3 年くらいまでは学校に行っている。海バジャウは国籍がなく、学校の授業料が倍になるということもあり、ほとんど無就学である。大学の学歴をとって村に戻ってきたケースはあるが教師となっている。

質問: 船外機を持っている比率は? (柳沼宣裕氏) 漁船のライセンスは取得しているか? (河野元子氏) → 回答: G 村以外はほぼ 100% 船外機付ボートを持っている。小さなボートのライセンスは必要ない。中型か大型漁船のライセンスは必要だが、海バジャウの人々はほとんど持っていない。LKI(漁業開発公社)に魚を卸すにはライセンスが必要だが、必ず定住化している世帯を仲介としてセンポルナの仲買人に渡している。職業カテゴリーで「仲買業」(H 村)や「漁業と農業」(O 村)と分類されている世帯はこのケースを含んでいる。「船長職」となっても実際に漁業をしていない場合もある。

資源をめぐる争いが表面化しないのはなぜか? (河野元子氏) 生業を支える天然資源の減少が危機意識につながっていないのはなぜ

か？(左右田直規)→回答:(1)定住化したバジャウ集団が小規模漁業から賃金・給与労働に移行する傾向がある。(2)その結果、定住化しなかった海バジャウ集団の漁業への専門化が進行しているため。トゥムアン(内藤発表)では狩猟は主として若者が行っているという報告があったが、ここでは60～70歳の高齢者が従事している。若い世代の海に対する愛着が予想外に強くなかった。

陸バジャウと海バジャウの人々のアイデンティティの違いは？(田村慶子氏)→回答:全体的に海に対する愛着についてはどちらが強い・弱いという差はない。陸バジャウの人々の食生活における魚類への愛着にも見られる。魚と鶏の肉の価格差はかなり縮まってきているのに、今でも魚を好んで買っている。説明として「鶏肉はアレルギーがでる」とか「海を背景に育ってきたのだから、魚こそ私たちの原点」という言説が食生活に見られる。

食生活のカロリー計算はどのようにしたか？(内藤大輔氏)→回答:カロリー計算は、世帯内の消費量(購入)と摂取量を聞き込み調査で調べ、それを世帯の人数(子どもは大人の半分)で割り、カロリー換算した。食事内容は朝昼晩、誰が何を食べたかを聞いた。米の摂取量は米びつの減少量から、副食は調理直後をとらえて計量させてもらった。

(杉本均)